
ラブカクテルス その２ ９

風 雷人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラブカクテルス その29

【Nコード】

N1039D

【作者名】

風 雷人

【あらすじ】

今宵は秘密の味をお楽しみください。ご賞味あれ。

いらっしやいませ。

どうぞこちらへ。

本日はいかがなさいますか？

甘い香りのバイオレットフィズ？

それとも、危険な香りのテキーラサンライズ？

はたまた、大人の香りのマティーニ？

わかりました。本日のスペシャルですね。

少々お待ちください。

本日のカクテルの名前は隠れ家でございます。

ごゆっくりどうぞ。

私は休暇を取った。

会社には、リフレッシュの為にニューヨークに行つてくると言つてある。

大体一ヶ月の予定だ。

しかし本当は違つていた。

私は誰も知らない隠れ家に籠もるのである。

私は今年の初めに引越した。

かなり年期の入った戸建てで、都会からは特急電車で一時間と、それほど不便ではない場所だった。

私は疲れていた。

何せ仕事が忙しくて忙しくて、そのお陰で恋人まで無くした。そんな事である？

私が何をしたというのか？

あまりの仕打ちに、私は気晴らしに引越しを思いついたのだった。それからまっぴら部屋探しが私の散歩を兼ねた趣味になった。

そして、色々な家を探しているうちに、ふらっと覗いた不動産屋で面白い物件の広告を目にして立ち止まった。

私がそれを見ていると、不動産屋の小さな、小太りの店主が声を掛けてきた。

それは珍しい物件です。建物自体はかなり痛んですが、まだまだ使えますし、お客様が気にとめているそれも、見たら絶対に気に入って頂けること間違いなしです。はい。

店主はそう言って、物件を案内すると誘ってきたので、私は断り、その地図だけコピーしてもらい、いつもと同じように散歩しながら訪ねてみることにした。

その周りにはあまり住居はなく、畑と竹林、それと廃棄のような神社がポツンとあるだけで、目的の物件はその町内の角地にあった。人影もまばらな割に駅からはそれほど離れてはなく、しかも駅の反対方はある程度拓けていて、買い物などは困る感じではなかった。帰りが遅くなったとしても、道は街頭が多く設置してあるし、駅と物件がある町内までの真ん中辺りに警察署もあるので安心そうだった。

少し物件の周りを見てみた。

家の廻りのフェイスは木製で、白いペンキで塗られていたが、かなり剥げて痛んでいた。

玄関には大きな蜘蛛の巣が張っている。

平屋で二階はなく、部屋数も間取図からみると三部屋で、一人で使うには充分そうだった。

少し小さな庭があったが、雑草で覆われていて、手入れは大変そうだった。

そして気になるあれ、しかしそれは外観からは見つけられなかった。

そう、それとは隠れ家だった。

物件の広告の下の方に、隠れ家付きと書いてあったのだった。

私はとりあえず、今度不動産屋さんと一緒に来ようと、その日は帰ることにした。

私はそれから、次の休みの日までずっとその家の事が気になって気になって仕方なかった。

誰か他の人に取りられたらどうしようとか、あの時不動産さんと出掛けるべきだったとか、仕事は手に就かないし、なかなか寝ることも出来ない毎日が続いた。

そしてようやく次の休みになり、私は朝早くからあの不動産屋さんへと出掛けた。

不動産屋さんは、私の顔を見るなり微笑んで、車の支度をするよとお茶を出してくれた。

私はホッした。

外観は痛んでいるようだったが、中は意外にきれいにしてあった。

昔の造りからか、玄関には土間があった。

部屋は和式の四畳半と、リビングにあたる広間は板張りでギシギシいった。

キッチンの流しは少し低めで、でも長くしてあった。二、三人がいつぺんに台所に立つても平気そうだった。

そして納戸があつて、不動産屋さんは、その床を指差した。

その床は、左端に四角い溝があつて、どうやら開閉するようだった。不動産屋さんはそこに近づき、壁に付いていたダイヤルを回し始めると、床の四角い溝の所がゆっくりと上がってきた。

下を覗くと、人の背丈より深い縦穴があり、梯子が掛かっていた。

不動産屋さんは下に降りて行った。私も続いた。

下まで降りると、縦穴は横に進んでいた。

少し行くと、三畳くらいのスペースがあり、不動産屋さんが灯りを

持って立っていた。

不動産屋さんがいうには昔、戦争のあった頃に、少し名のある文学者が戦争に反対して、隠れていた穴だという。

通ってきた穴は土だった、そこは本当の部屋だった。

本棚や、茶ダンス、ストーブなんかはそのまま置いてあった。

きっと一人でここにベッドを置けば最高のスペースになりそうだと私は思った。

立たなくても全ての場所に手が届く。

私の頭の中はもう、イメージが出来上がっていた。

私はその場でこの物件を借りる契約を交した。

それからしばらくは引越してバタバタしたが、落ち着いたところで私はヒソヒソと、地下の隠れ家に、色々なものを運び込みだした。気になつてはいたが忙しくて読めなかった本や、昔の趣味だった絵画セット、食器やミニガスコンロ、ポット。飲料水もかなり降ろしたし、インスタントものの食べ物や、携帯冷蔵庫に冷凍食品。電気は柱に付いていたので、そこからパソコンとテレビとビデオを繋いだ。

その他に気になるものを少しずつ降ろしては片付け、部屋に収まらないものは少し通路の穴を広げて棚を置いて詰めた。

そして私の隠れ家は出来上がった。

私はその間、仕事の時は集中することが出来たし、ある程度の目度がついたところで会社に休暇を申し出た。

隠れ家でバケーションだ。

やはり快適だった。

とりあえず、私は皆にニューヨークにいたと言った手前、インターネットでそれらしい写真や、お土産なんかをネットショップで注文した。

別に、悪い事をしている訳ではないので隠すことなどはなかったが、

やはり、隠れ家。

誰にも知られない方がそれらしい。

一切の人間関係から、私は私だけの世界に籠りたかった。

たまにはそんな世界もいいと思うのだ。

淋しくなったら、次に会社に行ったら、人との関係のありがたさが分かるだろうし、もし、淋しくならなければ、私は一人の孤独が好きだったということだ。

それだけのこと。

私は伸びをして、部屋に入った。

始めは、やっぱりいつもの癖で、何でも早く済まそうとしたが、二日目くらいからは、自分の時間を調整し直してゆっくりすることができた。

本は一ページ、一ページを噛むように読んだ。

作者の気持で読んだり、物語の主人公になって読んだり、同じ本を何回も繰り返し読んだりしたし、絵画も前から描きたかった絵を何度も何度も、納得いくまでデッサンして、色を載せるのも、色々はパターンを試して塗ってみた。

食事は気が付いた時に食べて、飲みたい時に飲んだ。

私はここにラジオや、時計は持って来なかった。

テレビもアンテナを繋いでなかったので、ビデオ意外は使い道もなかった。

完全な孤立した世界だった。

但し、一つだけアラムを置いていた。

それが鳴るまでは、この世は私のものだった。

意外と私は後者の方で、一人の孤独を楽しんだ。
今までしたくても出来なかった事をゆっくりと一つ一つやっていった。

心には、何もストレスは無く、しかも何か肌の調子もよくなった気がした。

気分上々だ。

しかし、やりたい事の半分も終わらない内に、アラームがなってしまった。

私は少しガツカリしたが、残りは次の機会にと重い腰をあげた。久しぶりに動かす足は、かなり鈍かった。

梯子を登って、隠れ家の扉を開けようとしたが何故か扉は開かなかった。

ナゼだろう。

私は思い切り扉を持ち上げたが、やはりダメだった。

きつと、何か荷物が扉の上に乗っかってしまったんだ。

私は梯子を一旦降りて考えたが、まあ、食べ物もまだまだあるし、やりたいことも。

きつとしばらくしたら誰かが気付いて探しに来てくれるに違いない。私はまた部屋に戻り、座り込んだ。

彼女の頭の上の世界に、モグラが顔を出すと、そこには、廃虚しかない世界が広がるだけだった。

動く人影も、何も見えなかった。

おしまい。

いかがでしたか？

今日のオススメのカクテルの味は。

またのご来店、心よりお待ちしております。では。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1039d/>

ラブカクテルス その29

2011年1月28日11時25分発行